

小説

# 太宰治と歩く 現代の「津軽」の旅



太宰治  
生誕百年



# 太宰治と歩く現代の「津軽」の旅

## 太宰ゆかりの地の紹介



小説「津軽」の像 (44 ページ) 小泊



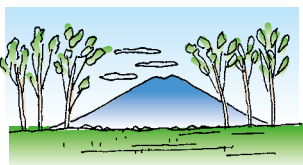
旧奥谷旅館 (24 ページ)



太宰治記念館「斜陽館」(29 ページ)



芦野公園・太宰治文学碑 (39 ページ)



旧修錬農場から見た岩木山 (27 ページ)  
ポプラ (32 ページ)



千畳敷海岸 (33 ページ)



旧秋田屋旅館 (35 ページ)





## 現代の「津軽」への誘い

「ね、なぜ旅に出るの？」

「苦しいからさ」

私は、昭和19年5月、小説『津軽』執筆のため、ふるさと津軽を旅しました。あれから60年以上の年月が流れ、津軽もすっかり変わってしまったんでしょうね。

皆さん、なつかしい、あるいは私の知らない、思い思いの現代の「津軽」を旅して、旅の話を私に聞かせてください。

---

### 太宰治と歩く現代の「津軽」の旅の構成

この冊子は、基本的に①小説『津軽』の原文とその解説、②原文に登場する市町村の現在の様子、③当該市町村の観光情報、④当該市町村に関連する太宰や『津軽』のゆかりの地、の内容で構成しています。

このほか、次のような、作家太宰治とその作品などを紹介するページも設けていますので、随所に太宰の足跡が残る「津軽」の旅のおともに加えてください。

- 1 小説『津軽』登場人物の紹介 (P 8)
- 2 太宰治が描いた『津軽』以外の作品～津軽を舞台とした作品の紹介～  
(P12)
- 3 太宰治作品年表 (主要作品) (P14)
- 4 太宰治文学・初期習作 (P18)
- 5 太宰治文学の文体 (P22)
- 6 青森県内の太宰治文学碑 (P28)
- 7 太宰治略年譜 (P30)
- 8 太宰治の人間関係 (P36)
- 9 エピソード紹介 (P40)
- 11 太宰治関連の主な映画紹介 (P45)
- 12 太宰治周辺の文学者紹介 (P46)

※『津軽』の原文・ルビは、新潮文庫『津軽』に依っています。

## 太宰治の小説『津軽』の旅

昭和19年（1944年）5月12日～6月5日

月 日	項 目	解説ページ
5月12日	上野発午後5時30分の夜行列車で青森へ。	
5月13日	午前8時青森到着、T君が出迎える。 午後バスで蟹田のN君宅へ。 N君宅泊。	7 9
5月14日	観瀾山で花見。その後、蝦田旅館へ移動。 Sさん宅で疾風怒濤の接待を受ける。 N君宅泊（～16日まで）。	11 13
5月17日	バスで今別へ、Mさん宅で歓待を受ける。 午後本覚寺へ。その後、徒歩で三厩へ。 丸山旅館泊。	15 17 19
5月18日	Mさんと別れ義経寺へ。その後、徒歩で龍飛へ。 奥谷旅館泊。	21 23
5月19、 20日頃	徒歩で三厩へ。その後、バスで蟹田へ。 N君宅泊。	
5月21 ～24日頃	金木の生家へ。 生家泊。 高流山へピクニック。 生家泊。 鹿の子川溜池へピクニック。 生家泊。	25、27 29
5月25日	五能線で木造の父の生家へ。その後、深浦へ。 秋田屋旅館泊。	31、33 35
5月26日	鱒ヶ沢、五所川原へ。 叔母きゑ宅泊。	37
5月27日	津軽鉄道で中里、バスで小泊へ。 ※タケと再会。タケ宅泊。	39、41 43
5月28日	蟹田へ。 N君宅泊。	
6月4日	海路青森へ。夜行列車で上野へ。	
6月5日	帰京。	

※太宰が小泊で再会した「タケ」は、小説『津軽』では「たけ」となっていますが、『津軽』の原文以外は、戸籍上の「タケ」と表記します。

## 小説『津軽』の青森

きざな譬え方をすれば、私の青春も川から海へ流れ込む直前であったのであろう。青森に於ける四年間は、その故に、私にとって忘れがたい期間であったとも言えるであろう。

（解説） 海のある小都会青森、太宰はここで中学時代を過ごした。下宿から2キロ余の道を通い、浪の音や松のざわめきの聞こえる校舎で過ごした。文学に目覚め、創作を発表、自ら同人雑誌も出して未来の「太宰治」を予感させるものがあったのも中学時代であった。また、異性への関心。秋のある月の無い夜、同じ中学に入学した弟を誘い、棧橋にやってきた。そして、先生から聞いた「赤い糸」のことを話して、胸をときめかせた。中学を4年で修了して官立高校に進学するという目標を持ち、よく勉強もした太宰。少年期から青年期に移るたゆましいの時期、太宰にとっては忘れられない4年間であった。



合浦公園

## 現代の青森市の様子



三内丸山遺跡

三内丸山遺跡、小牧野遺跡など縄文時代の遺跡が点在し、悠久の歴史に触れることもできる町となっています。

『津軽』では「人口十万を越えている様子であるが、旅人にとっては、あまり感じのいい町では無いようである」と書かれた青森市は、現在人口30万人を超える青森県の県庁所在地。県のほぼ中央に位置し、県内観光の拠点としての機能も担っています。市内には日本最大級の縄文集落跡で、国特別史跡に指定されている

## 青森市の観光情報

十和田八幡平国立公園に指定されている八甲田エリアは、市街地からバスで1時間ほど。田代湿原、地獄沼、睡蓮沼、日本一のアーチ橋城ヶ倉大橋など見所豊富。また、新緑、紅葉、樹氷など四季折々の景観が楽しめます、さらに、トレッキングやウィンタースポーツで汗を流した後は、国民保養温泉地第1号で、壮大なヒバの千人風呂で有名な酸ヶ湯温泉をはじめ、八甲田温泉、城ヶ倉温泉、寒水沢温泉など多様な泉質の温泉が楽しめます。

市内には、青森県近代文学館があり、太宰治、寺山修司をはじめ県を代表する13人の作家を中心に紹介しており、『人間失格』の草稿など太宰の貴重な資料も展示しています。郷土の版画家棟方志功の作品を多数展示している棟方志功記念館、三内丸山遺跡の隣にあり、県出身芸術家の作品を多数展示している青森県立美術館など、青森県の文化に触れられる施設も充実しています。



秋の八甲田山

## 青森市のゆかりの地

旧制中学時代の4年間で過ごした太宰は、寺町（現在の本町一丁目付近）にあった親戚の豊田呉服店に下宿し、2キロ余離れた合浦公園に隣接の青森中学校（現市営球場）に通いました。通学途中には、“隅田川に似た広い川”の堤川が流れ、からだを鍛えるために100Mダッシュを行った常光寺は下宿のすぐ近くにあり、弟礼治と赤い糸について話合った青森港の旧棧橋は、現在の中央埠頭付近にありました。



浅虫温泉

郊外の浅虫温泉も太宰との関わりが深く、“母と病後の末の姉が湯治をしている借家に寝泊まりし、青森中学に通いながら受験勉強をした忘れられない土地”であり、“津軽に於いては、最も有名”な温泉と紹介しています。また、青森県出身の世界的版画家「棟方志功」ゆかりの温泉としても知られています。

## 小説『津軽』の弘前

私はそれまで、この弘前城を、弘前のまちのはずれに孤立しているものだとばかり思っていたのだ。けれども、見よ、お城のすぐ下に、私のいままで見た事もない古雅な町が、何百年も昔のままの姿で小さい軒を並べ、息をひそめてひっそりうづくまっていたのだ。

（解説）「<sup>こもりぬ</sup>隠沼」のような弘前の町、古雅とハイカラの入り交じった町、弘前。そこは太宰にとって疾風怒濤の青春を送った、懐かしくも又悔恨の町であった。官立弘前高等学校に入学した太宰は、間もなく芥川龍之介の死に大きなショックを受ける。そして、その頃から生活

も一変する。弘前は不思議と義太夫のさかんな町である。太宰もまた、女師匠のところへ通い、習った。芸者遊びも覚えた。同期の上田重彦（石上玄一郎）に刺戟された太宰は、「細胞文芸」という雑誌を出す。4号で終わったが、中央の作家の原稿を載せるなど、太宰の作家たらんとこの堅い決意を示すものである。当然のごとく学業はままたらぬ状況にあり、高校3年の12月、テストの前日に自殺未遂を起こすのであった。



弘前城

## 現代の弘前市の様子



弘前市立図書館

太宰が“津軽人の魂の拠りどころ”としながら、“旧藩主の代々のお城がありながら、県庁を他の新興のまちに奪われている、だらしない城下まち”と評した弘前市は、現在、人口約18万人。津軽平野の南西部に位置し、西に県内最高峰の“津軽富士”岩木山を抱き、津軽藩の城下町として栄えた面影を遺す一方、明治・大正時代のキリスト教宣教師による洋風建築が加わり、情緒豊かな街並みが形成されています。



## 弘前市の観光情報

城下町弘前の中心部では、太宰が「弘前城と、最勝院の五重塔とは、国宝(昭和25年の文化財保護法施行前の旧国宝)に指定されている。」と紹介しているように、藩政時代に建立され、国の重要文化財に指定されている多くの寺社を見ることができます。また、石場家住宅や仲町伝統的建造物群保存地区では江戸時代の佇まいを体感することができます。また、明治、大正時代に建てられた青森銀行記念館、弘前学院外人宣教師館等の洋風建築も多く、時代を超えた独特の街並みが演出されています。



最勝院五重塔

津軽富士岩木山へは、津軽岩木スカイラインを利用して車で8合目まで登ることができ、眼下には遠く北海道まで広がる大パノラマを楽しむことができます。なお、9合目まではリフトもあり、そこから山頂までは徒歩で40分程度です。また、山麓には、嶽温泉郷、吉永小百合主演の「草を刈る娘」の舞台となった湯段温泉郷、百沢温泉郷などの温泉が多く、旅の疲れを癒してくれます。

## 弘前市のゆかりの地

太宰が3年間通った旧制弘前高校(現弘前大学)の構内には、旧制高校の在校生名簿記念碑が立っており、第7期(昭和2年)入学者の中に津島修治(太宰治)の名を見ることができます。また、在学中の3年間下宿した遠縁の藤田宅は、弘前市が太宰治まなびの家として保存、太宰の居室も復元され、当時の様子を偲ぶことができます。なお、旧藤田



太宰治まなびの家

家住宅は、大正時代の住宅としても貴重な資料となっています。

太宰に「城下に於いて最も繁華な商店街」と書かれた土手町商店街から少し入った「かくみ小路」には、太宰が通ったと言われる「万茶ん」(東北で最古の喫茶店)が営業しています。

昭和19年5月13日

## 小説『津軽』の青森（青森駅）

青森には、朝の八時に着いた。T君が駅に迎えに来ていた。私が前もって手紙で知らせて置いたのである。／「和服でおいでになると思っていました」／「そんな時代じゃありません」私は努めて冗談めかしてそう言った。／T君は、女のお子さんを連れて来ていた。ああ、このお子さんにお土産を持って来ればよかったと、その時すぐに思った。

**（解説）** 日常生活は、ほとんど和服と下駄ですごしていた。しかし、長途の旅となるとそれは違った。あり合わせの木綿の布切れを紺色に染めて、ジャンパーのようなものとズボンを手がけた。それに緑色のゲートルをまき、白ズック、スフのテニス帽。奇妙な格好での出で立ちである。小泊では、奇妙な服装と長身だったこともあり、「アメリカのスパイでねが」と疑われる。

お土産といえば、N君の4歳の子が積木のおもちゃをもらっている。また、戦後、金木から中学時代世話になった豊田家の黒石の疎開先を訪ね「お土産だよ」と言って唐草模様の風呂敷包みをコタツの上に置いた。あけると、中からネーブルがたくさん転がり出たというエピソードが伝えられる。



JR 青森駅

### 現代の青森市の様子

太宰は、17時30分上野発の急行列車で青森駅に到着していますが、現在では、上野から青森に到着する夜行列車は、奥羽線周りの特急「あけぼの」一本となっています。

『津軽』にも登場する青函連絡船は昭和63年に廃止されましたが、現在は、青森駅に隣接する地域をウォーターフロントとして整備、青函連絡船として活躍した八甲田丸がメモリアルシップとして保存され、当時を偲ぶことができます。



中央埠頭からウォーターフロントを望む

## 小説『津軽』登場人物の紹介

名 称	人物紹介、『津軽』での接点等
T君	外崎勇三（東青病院の検査技師、元津島家使用人） 娘・文子連れて青森駅で出迎え、市内寺町の自宅で休憩させる。観瀾山での花見に参加。
N君	中村貞次郎（蟹田町会議員） 太宰の青森中学時代の同級生。蟹田滞在中は自宅に逗留させ、太宰を龍飛まで案内している。
Sさん	下山清次（東青病院蟹田分院事務長） 観瀾山での花見の後、町内の自宅で疾風怒濤の接待を行う。
Mさん	松尾清照（今別の病院のレントゲン技師） 観瀾山での花見に参加、今別の自宅に迎え、三厩まで同行している。
Hさん	樋口定夫（T君の病院の同僚） 観瀾山での花見に参加。
長兄	津島文治（県会議員、後の青森県知事、参議院議員） 生家で太宰を迎え、鹿の子川溜池へ同行。
次兄	津島英治（金木銀行の経理、津島家の経理等を務める） 生家で太宰を迎える。
陽子	（長兄の長女） 高流山、鹿の子川溜池に同行。
光ちゃん	（次姉の末娘） 生家で太宰を迎える。
アヤ	（津島家の下男） 高流山、鹿の子川溜池に同行。
Mさん（木造）	松木秀輔（父源右衛門の生家の当主） 木造で太宰をもてなす。
中畑さん	中畑慶吉（津島家に信頼された五所川原の呉服商） 太宰が中畑宅を訪問、長女けいが乾橋まで案内する。
従姉	津島りゑ（叔母きゑの長女） 留守のきゑに代わり太宰をもてなす。
金丸の娘さん	加藤タキ（金丸呉服店の娘） 中里で小泊に向かう太宰に声をかける。
たけ	越野（近村）タケ（3歳から5年間太宰を子守） 小泊での再会の場面は、全体のクライマックス。運動会の掛小屋まで太宰を案内したのは、タケの五女節。

## 小説『津軽』の蟹田（N君宅）

「リンゴ酒でなくちゃいけないかね。日本酒も、ビールも駄目かね」と、N君は、言いにくそうにして言うのである。／……日本酒やビールの貴重な事は「大人」の私は知っているの、遠慮して、リンゴ酒と手紙に書いたのである。津軽地方には、このごろ、甲州に於ける葡萄酒のように、リンゴ酒が割合に豊富だという噂を聞いていたのだ。

**（解説）** N君とは中学時代からの友だちである。東京に職を得たN君とはほとんど毎日のように逢った。N君は、家の都合でやがて帰郷する。今は町会議員に選ばれ、町にはなくてはならぬ人になっている。

戦局も押しつまり、日本酒は配給制で貴重品である。太宰は遠慮してリンゴ酒と言った。N君は日本酒をしこたま用意していた。二人はこの夜、お膳の蟹の山を眺め、夜の更けるまで飲み続けた。食べ物に無関心であれという自戒を破って、太宰は大いに好きな蟹を食べた。前年書き下ろした『右大臣実朝』は、史実に基づいた作品だが、実朝を暗殺した公暁禅師はあまり史実にとらわれていない。鎌倉の浜辺で、廢船の底に巣くう蟹をとらえ、それを食らう場面は、太宰の嗜好を投影させている。



旧中貞商店

## 現代の蟹田の様子



風の町交流プラザ「トップマスト」

現在、蟹田は青森駅から津軽海峡線の特急列車で約30分、蟹田港からは対岸のむつ市脇野沢までフェリーが就航しています。また、『津軽』では、「蟹田警察署は、外ヶ浜全線を通じていちばん堂々として目立つ建築物の一つであろう」と書かれていますが、現在、蟹田港には、風の町交流プラザ「トップマスト」がランドマークとしてそびえています。

## 外ヶ浜町(蟹田)の観光情報

太宰たちが花見の宴を開いた観瀾山は、山というより小高い丘といった様子ですが、蟹田港近くに位置し、陸奥湾と津軽海峡が眺望できる景勝地となっています。桜は、例年、ゴールデンウィーク頃が見頃です。桜の本数は減ってしまいましたが、太宰が書いた“静かに、淡い”桜を見ることが出来ます。また、観瀾山一帯は海水浴、キャンプ場等が整備された公園となっています。太宰が“鼓腹撃壤の別天地”と評した蟹田は、海の幸、山の幸にめぐまれ、蟹田港周辺は、4月頃から名産のトゲクリガニ、シロウオの漁で活気づきます。4月下旬から5月上旬には「蟹とシロウオ祭り」が行われ、夏には「外ヶ浜まつり」が行われます。また、8月7日青森ねぶた祭りのフィナーレを飾る花火とねぶたの海上運行を見学するための「陸奥湾クルーズ」は蟹田港を起点としています。



観瀾山公園海水浴場

## 外ヶ浜町(蟹田)のゆかりの地

太宰は『津軽』の旅で、当時精米所を営んでいたN君宅に最も長く滞在しています。N君宅は国道280号線沿いにあり、現在も奥さんが営んでいた雑貨店「中貞商店」の文字を見ることが出来ます。なお、商店は廃業し、居酒屋として営業しています。

N君、T君、Sさん等と花見を行った観瀾山には、佐藤春夫

の筆による文学碑が建てられ、文学碑からは下北半島や夏泊半島、蟹田港が見下ろせます。花見を終えた一行が移動した「蟹田で一ばん大きいEという旅館(蝦田旅館)」はその後火事で焼失、国道280号線沿いで蝦田食堂として営業しています。JR蟹田駅ホームでは、「蟹田ってのは

風の町だね」という『津軽』の一節が書かれた案内板が訪れた人々を迎えます。



観瀾山公園に建つ文学碑

昭和 19 年 5 月 14 日

## 小説『津軽』の蟹田（観瀾山）

かんらんざん  
観瀾山。……その山は、蟹田の町はずれにあって、高さが百メートルも無いほどの小山なのである。……この蟹田あたりの海は、ひどく温和でそうして水の色も淡く、塩分も薄いように感ぜられ、磯の香さえほのかである。雪の溶け込んだ海である。ほとんどそれは湖水に似ている。

(解説) 桜花の下芝生にあぐらをかき座り重箱を広げる。他に蟹とシャコが竹の籠にいっぱい。穏やかな陸奥湾が眼前に広がっている。まるで湖水のよう。その日は、まぶしいくらいの上天気で、風は少しもない。しかし、前日には西風が強く吹いて、「蟹田ってのは、風の町だね」と太宰は独り合点の卓説を吐いたりした。



観瀾山から下北半島を望む

らぐ程度で、ひっそりと静まり返っていた」とある。太宰の娘である。この少女の感覚は太宰そっくりである。

### 現代の蟹田の様子

蟹田には、太宰文学愛好者が集まって結成した「外ヶ浜太宰会」があり、外ヶ浜町中央公民館内に会員が収集した写真等を常設展示しています。『津軽』のN君(中村貞次郎氏)の出身地だけに、N君をはじめ太宰を支えた人々の資料、観瀾山で花見をしたメンバーの写真など、他では見られない貴重な資料を見ることができます。



展示資料と太宰会のみなさん

## 太宰治が描いた『津軽』以外の作品

～津軽を舞台とした作品の紹介～

1 **魚服記** (金木)

舞台は、ほんじゅ山脈の山奥の滝近く。「馬禿山」は現存し、滝のモデルは小田川上流の「藤の滝」と言われている。

2 **思ひ出** (金木、青森)

金木の生家での生活から青森市での中学時代の思い出を描いている。

3 **雀こ** (舞台は特定されていない)

4 **おしゃれ童子** (金木、青森、弘前)

5 **兄たち** (金木)

生家での3人の兄を客観的に描いている。

6 **服装に就いて** (弘前)

7 **帰去来** (五所川原、金木)

10年ぶりに帰郷したときの様子を描いている。

8 **故郷** (金木)

『帰去来』の続編。実録に近い自伝的小説。

9 **庭** (金木)

10 **やんぬる哉** (金木)

11 **親といふ二字** (金木)

12 **嘘** (金木)

13 **雀** (五所川原、金木)

「津軽鉄道」が登場する。

14 **十五年間** (金木)

15 **チャンス** (弘前)

16 **親友交歓** (金木)

17 **冬の花火** (津軽地方のある部落)

「浪岡駅」が登場する。

18 **春の枯葉** (津軽半島、海岸の僻村)

19 **トカトントン** (Aという村)

20 **母** (鯉ヶ沢)

旅館は「水天閣」と言われている。

その他、随筆「校長三代」「五所川原」「青森」「黒石の人たち」

綴方「僕の家」「僕の幼時」「僕ノ町」「僕の学校」「僕の家庭」

「僕の学校生活」も津軽を舞台としている。



藤の滝



冬の津軽鉄道

## 小説「津軽」の蟹田（Sさん宅）

Sさんのお家へ行って、その津軽人の本性を暴露した熱狂的な接待振りには、同じ津軽人の私でさえ少しめんくらった。……／「……リンゴ酒を持って来い。なんだ、一升しか無いのか。少い！ もう二升買って来い。待て。その縁側にかけてある干鰯<sup>ひんがら</sup>をむしって、待て、それは金槌<sup>かなづち</sup>でたたいてやわらかくしてから、むしらなくちゃ駄目なものなんだ。待て、そんな手つきじゃいけない、僕がやる。干鰯をたたくには、……」

**（解説）** Sさんの奥さんに命じての接待ぶりはいよいよエスカレート。クラシックのレコードまでかけろとわめきちらし、とどのつまりは“卵味噌”と連呼し“カヤギ”に至る。誇張法を用いた描写ではない。この疾風怒濤のような接待は、津軽人の愛情表現なのだと太宰は言う。

もちろん、これは創作である。Sさんは、この狂乱の接待ぶりを反省、翌日小さくなって酒を飲み、奥さんに叱られるのを覚悟している。

この接待ぶりに類似するもう一か所。N君が養育する青森の工業学校に通う亡妹の子が、青森から歩いて夜中に蟹田へ帰ってくる。N君はものも言えず、この子を抱きしめ、奥さんをやたらに叱りとばし、「それ、砂糖湯を飲ませろ、餅を焼け、……」などと言いつけるのである。



ホタテ味噌カヤギ

### 現代の蟹田の様子

太宰が「蟹田ってのは、風の町だね」と書いたように、蟹田は陸奥湾方向からのヤマセ（東風）が名物で、現在では「風の町」がキャッチフレーズになっています。太宰は、また「蟹田は蟹の名産地」とも書いていますが、蟹田という地名のとおりトゲクリガニは町の特産品で、旬である春、青森県内の花見には欠かせない味となっています。



トゲクリガニ



## 太宰治作品年表（主要作品）

年	作 品 名
昭和 8 年	魚服記
	思ひ出
昭和 9 年	彼は昔の彼ならず
	ロマネスク
昭和 10 年	逆行（第 1 回芥川賞候補）
	道化の華
昭和 11 年	虚構の春
	狂言の神
昭和 12 年	二十世紀旗手
	HUMAN LOST
昭和 13 年	満願
	姥捨
昭和 14 年	富嶽百景
	黄金風景（国民新聞企画の短編小説コンクール当選作品）
	女生徒（北村透谷記念文学賞「副賞牌受賞」）
昭和 15 年	駈込み訴へ
	走れメロス
昭和 16 年	東京八景
	新ハムレット
昭和 17 年	正義と微笑
昭和 18 年	帰去来
	右大臣実朝
昭和 19 年	新釈諸国噺
	津軽
昭和 20 年	バンドラの匣
	お伽草紙
昭和 21 年	苦悩の年鑑
	冬の花火、春の枯葉
昭和 22 年	メリイクリスマス
	ヴィヨンの妻
	斜陽
昭和 23 年	桜桃
	人間失格
	グッド・バイ

昭和19年5月17日

## 小説『津軽』の今別（Mさん宅）

それは私が蟹田<sup>かにた</sup>でつい悪口を言ってしまったあの五十年配の作家の随筆集が、Mさんの机の上にきちんと置かれている事であった。愛読者というものは偉いもので、私があの日、蟹田の観瀾山であれほど口汚くこの作家を罵倒<sup>ばとう</sup>しても、この作家に対するMさんの信頼はいささかも動揺しなかったものと見える。

（解説） 観瀾山で、つい小説の神様と呼ばれる作家の悪口を言ったが、Mさんはじめ、その日一緒に花見し酒を飲んだ人たちも、太宰の話に少しも共感しなかった。Mさん宅に立ち寄って、太宰はその作家の随筆集を目にする。上等な紙に、大きな活字ならば、たいていの文章は立派に見えるものだと、負け惜しみを言う。

太宰の天才意識について面白い話がある。『惜別』の取材の折り、担当者相手に「明治以降、日本の作家で文学史に残る奴は、鷗外と、あとはもう俺しかない」と気炎を上げたという。太宰は鷗外を生涯愛読した。そして、その作家を『如是我聞』で志賀直哉と名指し「腕力の強いガキ大将、お山の大将、乃木將軍」などと罵詈雑言を浴びせることになる。



旧Mさん宅

### 現代の今別町の様子

太宰に「明るく、近代的とさえ言いたいくらいの港町」と書かれた今別町はJR津軽線が通り、青森駅から今別駅までは直通列車で約1時間15分で到着します。昭和63年に開通した青函トンネルの本州側入口の町として、将来は、北海道新幹線「奥津軽駅（仮称）」の開業が予定されています。



青函トンネル入口

## 今別町の観光情報

津軽国定公園に指定されている景勝地婁月海岸は、切り立った断崖と岩礁からなる海岸線が約3kmにわたって続きます。先端の高野崎には高野崎灯台があり、灯台から遊歩道で海岸まで降り、「潮騒橋」と「渚橋」をわたり岩場で釣りや磯遊びが楽しめます。岬からは北半島、龍飛崎、さらに北海道松前半島まで望むことができます。また、海岸線沿いには、黒い岩肌の絶壁鑄釜崎や嘉永5年(1852)に吉田松陰が通ったことからその名がついたといわれる岩のトンネル「松陰くぐり」など変化に富んだ光景を見ることができ、「海峡あすなる公園」や「海峡はまなす公園」が整備されています。

一方、海岸線を離れると、青函トンネル入口公園では、世界最長の海底トンネルを通る列車を間近で見ることができ、眺海の森林ウッドパークでは、深い緑の中でのフィールドアスレチック、展望台からの緑と青い海のコントラストなどを楽しむことができます。



婁月海岸

## 今別町のゆかりの地



本覚寺 (大仏と青銅塔婆)

に、本覚寺を有名にしたのは、中興の祖5世貞伝和尚であり、太宰も本覚寺で、50年配のおかみさんらしき人から貞伝和尚の話聞いています。現在、境内には、貞伝和尚が鑄造し、42歳で自らその下の穴に入って即身成仏したといわれる「南無阿弥陀仏」と刻まれた青銅塔婆(念仏名号塔、県重宝)、隣には津軽半島唯一の大仏像があります。

太宰は、蟹田のN君宅からバスで今別に移動、観瀾山で文学について語ったMさん宅で酒を飲んだ後本覚寺を訪れ、徒歩で今別を後にしています。

本覚寺は、N君が「今別へ来て本覚寺を見なくちゃ恥です。貞伝和尚は、外ヶ浜の誇りなんだ」と言っているよう

## 小説『津軽』の今別（本覚寺）

「たいしたお寺でもないじゃないか」と私は小声でN君に言った。……／私は気が重かった。しゅしゅN君の後について行ったが、それから、実にひどいめに逢った。……／N君は、ひとり熱狂して膝をすすめ膝をすすめ、ついにはその老婦人の膝との間隔が紙一重くらいのところまで進出して、一問一答をつづけるのである。

**（解説）** N君が言う。今別へ来て本覚寺を見なくちゃ恥だ。見に行こうとけしかけられ私（太宰）とMさんは重い腰をあげる。N君の貞伝和尚に対する情熱はなかなかのもの。N君はMさん宅の酒でかなり酔っている。住職は留守で、大黒らしい人が出て来て本堂へ案内、長い長い話が始まる。N君はひとり熱心に質問を続ける。この寺は貞伝和尚が何時建立したのかと愚問を発したり、テイザン和尚と言ったりして滅茶苦茶である。そのうちに、あの見事な額の文字は、大野九郎兵衛の書いたもの、例の忠臣義士ですと大黒の説明が始まる。彼には臨終の地とされる場所が全国に数か所ある。本覚寺にもそれと目される墓がある。N君は最後に、君たちのために、大黒の相手をして、僕は犠牲者だとほやくのである。



本覚寺

### 現代の今別町の様子

毎年 8 月に行われる荒馬まつりは、荒馬と手綱取りの 2 人が組となり、独特の踊りで勇壮な馬の働く姿を表すと、太鼓と笛が美しくも力強い音色を奏で、それに扇ねぶたの山車が加わった隊列で町内を練り歩き、田の神に感謝を捧げる様子は、多くの観光客を惹きつけています。



勇壮な大川平地区の荒馬まつり

## 太宰治文学・初期習作

——旧制中学・旧制高校・大学時代の小説と戯曲

作 品 名	署 名	発 表 誌	発行年月
最後の太閤	津島修治	青森中学校校友会誌 34	大 14・3
戯曲 虚勢	津島修治	星座 創刊号	大 14・8
角力	辻魔首氏	青森中学校校友会誌 35	大 14・10
犠牲	津島修治	蟹気楼 創刊号	大 14・11
地図	津島修治	蟹気楼 11・12月号	大 14・12
負けずぎらひと敗北ト	津島修治	蟹気楼 1月号	大 15・1
私のシゴト	津島修治	蟹気楼 2月号	大 15・2
針医の圭樹	辻島衆二	蟹気楼 4月号	大 15・4
瘤	辻島衆二	蟹気楼 5月号	大 15・5
将軍	津島修治	蟹気楼 6月号	大 15・6
哄笑に至る	津島修治	蟹気楼 7月号	大 15・7
口紅	辻島衆二	青んぼ 創刊号	大 15・9
モナコ小景	津島修治	蟹気楼 10月号	大 15・11
怪談	津島修治	蟹気楼 11・12月号	大 15・12
掌劇 名君	津島修治	蟹気楼 1月号	昭2・2
無間奈落 ※1	辻島衆二	文芸細胞 1～2号	昭3・5～6
股をくぐる	辻島衆二	文芸細胞 3号	昭3・7
彼等と其のいとしき母	辻島衆二	文芸細胞 4号	昭3・9
此の夫婦	津島修治	弘前高校校友会雑誌 13	昭3・12
鈴打	小菅銀吉	弘高新聞 5号	昭4・2
哀蚊	小菅銀吉	弘高新聞 6号	昭4・5
虎徹宵話 ※2	小菅銀吉	狐騎兵 6号	昭4・7
花火	小菅銀吉	弘高新聞 8号	昭4・9
地主一代(長編小説) ※3	大藤熊太	座標 1,3,5号	昭5・1～5
学生群(長編小説) ※4	大藤熊太	座標 7,8,9,11号	昭5・7～11

追記 他に「比賀志英郎」の署名で発表の『彼』（「文芸細胞」3 昭和3・7）、『哀れに笑ふ』（弘前高校「校友会雑誌」14 昭和4・3）が津島修治の可能性が高いと相馬正一に検証され、翻刻（「新潮」平成15・9、16・7）発表された。

※1、3、4 いずれも未完に終わった。

※2 改訂稿が弘前高校「校友会雑誌」15 に掲載された。

昭和19年5月17日

## 小説『津軽』の三厩（丸山旅館）

「これは鯛ですけどね、これをそのまま塩焼きにして持って来て下さい」／この女中さんは、あまり利巧りこうでないような顔をしていて、ただ、はあ、とだけ言って、ぼんやりその包を受取って部屋から出て行った。／「わかりましたか」N君も、私と同様すこし女中さんに不安を感じたのであろう。呼びとめて念を押した。

**（解説）** 今別で買った鯛を一尾のまま塩焼きにしてくれるよう女中に頼む。女中があまり利巧でなかった、いや、N君の三分にしなくてもいいというのが悪かったのか、だされたのは頭も尾も骨もない、五つの切り身だった。のんきなN君に、三つ切りを五つ切りにした、この人はしゃれているよと乾盃を強いられ、私は酩酊してさっさと寝てしまう。

後日の深浦の料亭では、酒だというと、すぐ持ってきた。40年配のおばさんだった。深浦の名所などを聞けると思っていたら、そこへ若い女中が現れ、妙にキザな洒落をとばすので、さがってくれというと、彼女はふくれて立ち上がった。するとおばさんも一緒だった。彼女が追い出されたのに、おばさんは残るわけにいらなかった。



義経寺から見た三厩漁港

### 現代の外ヶ浜町（三厩）の様子

太宰は、今別から徒歩で三厩に来ています。昭和33年に現在のJR津軽線蟹田～三厩間が開業、終着駅である三厩駅へは青森駅からの直通列車で約1時間30分。地下を青函トンネルが通っていますが、今別から北海道まで地上に出ることはありません。三厩駅は津軽半島最北端の寂寥感を醸し出しています。



冬の三厩駅

## 外ヶ浜町(三厩)の観光情報

三厩駅から龍飛方面に進むと、風水の浸食で形成された3つの穴が開いた大きな奇岩・厩石があり、周辺は厩石公園として整備されています。ここから山手の石段を登ると、龍馬山義経寺があり、正面が観音堂で、円空が彫った「観世音菩薩座像(県重宝)」が安置されています。



義経海浜公園と甲岩

周辺の海岸線は、「義経海浜公園」として、海水浴場、キャンプ場が整備され、防波堤では磯釣りを楽しむこともできます。毎年8月に行われる「みんなや義経まつり」の会場にもなっています。また、海岸には源義経が無事北海道に渡れるようにと、大切にしていた甲(かぶと)を海神にささげた場所という義経ゆかりの「甲岩」があります。なお、龍飛崎までの国道339号線沿いの海岸線には変化に富んだ景観が続き、龍飛崎付近には、義経由来の「鐙岩」「帯島」もあり、義経の伝説を辿るいにしえのロマンに触れながらの旅を楽しむことができます。

## 外ヶ浜町(三厩)のゆかりの地

今別で買った鯛を持って、N君、Mさんとともに三厩の宿に着いた太宰は、宿の女中さんに鯛を「このまま塩焼きにする」よう頼みますが、N君の追加の説明のせい、結局は五つに切られ「地団駄を踏む思い」をします。この舞台となった丸山旅館は、国道280号線と339号線が交わる三厩漁港の近くにありましたが、現在は取り壊され、空き地となっています。



義経寺から見た厩石

丸山旅館でMさんと別れた太宰は、N君と義経寺を訪れますが、故郷の伝説に奇妙なはずかしさを感じて、三厩の地名の由来となった“巨石の前をことさらに急いで通り過ぎ、”龍飛に向かって移動しています。

昭和 19 年 5 月 18 日

## 小説『津軽』の三厩（義経寺）

「登って見ようか」N君は、義経寺の石の鳥居の前で立ちどまった。……／「うん」私たちはその石の鳥居をくぐって、石の段々を登った。……／「これか」／石段を登り切った小山の頂上には、古ぼけた堂屋が立っている。……私はなぜだか、ひどくのがにがしい気持で、／「これか」と、また言った。／「これだ」N君は間抜けた声で答えた。

（解説） 義経主従は平泉から逃れ、三厩に至る。渡道の際、海の荒れを



義経寺仁王門

鎮めるため、岩頭で三日三晩観音に祈願したところ、白髪の翁が現れ3頭の竜馬を与えると告げる。岩頭を下りたところ3頭の竜馬が岩穴につながっていた。観音を岩頭（厩石）に安置し、馬に乗って無事に海を渡ったという。このことが三厩、厩石の起源になったといわれる。義経寺は円空の開基とされ、石段を登り切った小山の頂上に建っている。堂の扉に源家の紋が付いている。私（太宰）は、ひどく苦々しい気持ちであった。石段のところどころの窪みが弁慶の足跡だとか、義経の馬の足跡だとか、N君が弱々しく言うのを私（太宰）は信じたい。が、だめであった。故郷のこのような伝説は奇妙に恥ずかしい。

### 現代の外ヶ浜町（三厩）の様子

太宰が歩いた三厩から龍飛までは約14km。海岸線の国道339号線には、かつて13か所の洞門がありましたが、道幅あるいは落石の問題から取り壊されたり、使われなくなり、現在使用されているのは、3か所を残すのみとなっています。なお、山側を通る“あじさいロード”も整備されています。



国道339号線に残る親子洞門



## 太宰治文学の文体

——太宰治文学の魅力は巧みな語りのさまざまな文体にある。処女創作集『晩年』にそれは試みられ、全期を通して多彩な作品群が発表された。

### 1 女性独白形式の文体 - 『燈籠』(昭和12年)

「言えは言うほど、人は私を信じて呉れません。逢うひと、逢うひと、みんな私を警戒いたします。ただ、なつかしく、顔を見たくて訪ねていっても、なにしに来たというような目つきでもって迎えて呉れます。たまらない思いでございます。」

### 2 訴え形式の文体 - 『駈込み訴へ』(昭和15年)

「申し上げます。申し上げます。旦那さま。あの人は、酷い。酷い。はい。嫌な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。」

### 3 語り部形式の文体 - 『右大臣実朝』(昭和18年)

「おたずねの鎌倉右大臣さまに就いて、それでは私の見たところ聞いたところ、つとめて虚飾を避けてありのまま、あなたにお知らせ申し上げます。」

### 4 講演形式の文体 - 『喝采』(昭和11年)

「——檀君のこと、山岸外史の愛情、順々にお知らせしようつもりでございましたが、私の話の長びくほど、後に控えた深刻力作氏のお邪魔になるだけのことゆえ、どこで切っても関わぬ物語、かりに喝采と標題をうって、ひとり、おのれの心境をいたわること、以上の如くでございます。」(この部分作品末尾)

### 5 手記形式の文体 - 『惜別』(昭和20年)

「これは日本の東北地方の某村に開業している一老医師の手記である。／先日、この地方の新聞社の記者だと称する無精鬚をはやした顔色のわるい中年の男がやって来て、あなたは今の東北帝大医学部の前身の仙台医専を卒業したお方と聞いているが、それに違いないか、と問う。そのとおりだ、と私は答えた。」

### 6 パロディ・翻案形式の文体 - 『お伽草紙』(昭和20年)

「ムカシ ムカシノオ話ヨ／ミギノ ホオニ／ジャマツケナ／コブヲ／モツテル／オジイサン / このお爺さんは、四国の阿波、剣山のふもとに住んでいたのである。というような気がするだけの事で、別に典故があるわけではない。」

このほか、書簡形式(『虚構の春』(昭和11年))、日記形式(『正義と微笑』(昭和17年))、対談形式(『雌について』(昭和11年))、乱れたおしゃべり形式(『創生記』(昭和11年))の文体など多彩である。

## 小説『津軽』の龍飛（奥谷旅館）

「ええと、お酒はありますか」N君は、思慮分別ありげな落ちついた口調で婆さんに尋ねた。答えは、案外であった。／「へえ、ございます」おもながの、上品な婆さんである。そう答えて、平然としている。N君は苦笑して、／「いや、おばあさん。僕たちは少し多く飲みたいんだ」／「どうぞ、ナンボでも」と言って微笑んでいる。／私たちは顔を見合せた。



龍飛岬観光案内所（旧奥谷旅館）

（解説） お婆さんは配給の酒を飲まない人の家から集めていた。銚子を6本頼み、またたく間に飲み干す。貴重な酒である。「また」とは言えず、あとは持参の酒を飲むことにする。N君に酔いがまわった。自分（太宰）も酔うつもりだ。N君が歌う。牧水、啄木の歌も歌詞を間違え、調子はずれの蛮声。あたり迷惑

である。歌口もでたことだし、お休みなせえとお婆さんは言って、蒲団を敷いたのである。翌朝、寢床の中で童女の手鞠歌を聞く。希望に満ち曙光に似たものを可憐な歌声に感じて、たまらない気持ちになる。

多くの文人墨客がこの地に遊び奥谷旅館に投宿、感懐の記を残している。棟方志功が訪れたのは、まだ電灯のない時代。五木寛之は昭和44年頃である。時には太宰ファンの若い客で満員になり、廊下に寝る客もある状況だったという。

### 現代の外ヶ浜町（龍飛）の様子

龍飛崎から対岸の北海道白神岬までは、直線距離で19.5km。地下を昭和63年に開通した青函トンネルが通り、晴れた日には北海道をはっきりと望むこともでき、その近さを実感することができます。

龍飛崎から『津軽』の旅の終点小泊までは竜泊ラインが整備され、車では1時間ほどで行くことができます。



龍飛崎遠景

## 外ヶ浜町(龍飛)の観光情報

龍飛崎には、津軽半島最北端という旅情を誘う立地条件とその景観から、多くの観光客が訪れます。また、古くから多くの歌人等がこの地を訪れた詩歌を詠み、岬には吉田松陰詩碑、大町桂月歌碑など多くの碑が建て



階段国道

られています。さらに、石川さゆりの「津軽海峡冬景色」の歌碑も建てられ、2月上旬には「津軽海峡冬景色ツアー」も行われています。

龍飛の集落と岬を結ぶ約388m、362段の階段は、国道339号線に指定された日本で唯一の「階段国道」として、広く知られています。

龍飛崎には、道の駅にもなっている「青函トンネル記念館」があり、世界最長の海底トンネルの構想から完成までが、音と映像、資料、立体モデル等で展示されているほか、ケーブルカーで海面下140m地点まで潜り、実際の作業の雰囲気が味わえます。

## 外ヶ浜町(龍飛)のゆかりの地

太宰とN君が宿泊した奥谷旅館は平成11年に廃業しましたが、平成20年春、龍飛岬観光案内所「龍飛館」としてオープン。外観は当時のままで、太宰とN君が宿泊した部屋には、当時の様子を再現するように、膳、銚子等が置かれ、太宰とN



「龍飛館」付近の太宰治文学碑

君の名が書かれた宿帳(写し)も見ることができます。また、「龍飛館」の近くには、「ここは、本州の袋小路だ……」と『津軽』の一節を刻んだ文学碑が建っているほか、家と家の間を縫うように走る細い旧道が残り、太宰が「路がいよいよ狭くなった」「鶏小屋に頭を突込んだ」と描いた、当時の光景を想像することができます。

昭和19年5月21～24日頃

## 小説『津軽』の金木（高流山）

津軽の旅行は、五、六月に限る。れいの「東遊記」にも「……頁名所をのみ探らんと心の心にて行く人は必ず四月以後に行くべき国なり」としてあるが、旅行の達人の言として、読者もこれだけは信じて、覚えて置くがよい。津軽では、梅、桃、桜、林檎、梨、すもも、一度にこの頃、花が咲くのである。



満開のりんごの花

齊に咲きだす、もっとも快適な季節である。太宰は、江戸中期の医者・橋南谿たかはななんけいの旅行記『東遊記』から引用しながら、津軽のさわやかな季節を宣伝しているのである。そして、この高流山からの見晴らしを「津軽平野全部、隅から隅まで見渡すことが出来ると言いたいくらいだ」という感想を述べたあとで、「これはいい。僕だったら、ここへお城を築いて」と言いかけたら、「冬はどうします?」と陽子につつまれて、ぐつつまった。と記している。

### 現代の五所川原市（金木）の様子

『津軽』では「これという特徴もないが、どこやら都会ふうにちょっと気取った町である」と紹介された金木は、太宰ゆかりの地が多く残るほか、「太宰お膳」や「太宰らうめん」など太宰の名がついた食事や土産品も楽しめます。



津軽三味線会館での演奏風景

## 五所川原市(金木)の観光情報

太宰の生誕祭が行われる芦野公園は、日本さくら名所百選に選ばれ、例年4月29日から5月5日まで桜まつりが開かれます。園内には、太宰の文学碑のほか歴史民俗資料館、津軽三味線発祥の碑、児童動物園、キャンプ場などもあり、地域の行楽地として親しまれています。

また、津軽三味線発祥の地としても知られ、桜まつりには全日本金木大会が開催され、津軽三味線会館では、実際に三味線を弾く体験指導を受けることもできます。

川倉賽の河原地蔵尊は、恐山とともにイタコ霊媒が有名で、地蔵尊には約2,000体の地蔵が安置され、旧暦6月22日から24日までの例大祭には、県内外から多くの参詣客が訪れます。



津軽鉄道・走れメロス号(芦野公園駅)

## 五所川原市(金木)のゆかりの地



雲祥寺

金木は太宰の出身地であり、津島家の菩提寺の南台寺には父、兄文治が眠っています。生家を保存した太宰治記念館「斜陽館」では、直筆原稿や愛用のマント、書簡など約600点の貴重な資料が展示されています。また、疎開した際に生活や執筆の場とした、離れの「新座敷」も公開されています。

雲祥寺はタケの生家・近村家の菩提寺で、『思ひ出』に登場する卒塔婆の鉄の輪や、太宰がおびえた地獄極楽絵図を見ることができます。

『津軽』の舞台では、「津軽平野の永遠の誇り」と讃えた修練農場は、現在弘前大学附属金木農場となりましたが、ピクニックに行った高流山とともに、岩木山の秀麗な姿を見ることができます。また、2回目のピクニックに行った鹿の子川溜池には長兄文治の名が彫り込まれた石碑が残り、近くでは“五丈ばかりの細い”鹿の子滝を足下に見ることができます。

## 小説『津軽』の金木（修鍊農場）

津軽富士と呼ばれている一千六百二十五メートルの岩木山が、満目の水田の尽きるところに、ふわりと浮んでいる。実際、軽く浮んでいる感じなのである。したたるほど真蒼で、富士山よりもっと女らしく、十二単衣の裾を、銀杏の葉をさかさに立てたようにばらりとひらいて左右の均斉も正しく、静かに青空に浮んでいる。決して高い山ではないが、けれども、なかなか、透きとおるくらいに嫋娟たる美女ではある。

（解説） 岩木山を「十二単衣の裾を、銀杏の葉をさかさに立てたようにばらりとひらいて左右の均斉も正しく、静かに青空に浮んでいる」と形容した表現は、おそらく太宰以外にないのではないか。また、津軽の人間ほど、自分のところから見た岩木山を自慢する人はいないのではないか。柳田泉はこう言う「……津



旧修鍊農場から望む岩木山

軽富士とはいうが実は富士より形がよく、いわゆる天地秀霊の気が集って出来たというのは、岩木山のような山をこそいうのだと思う。弘前の人、旧城の本丸から見たのが一番よいようにいうけれども、それは土地びいきからいうので、岩木山の真実美しい形は、私の故郷（弘前の東半里）、しかも私の家の裏田圃から見るのが一番である。」

### 現代の五所川原市（金木）の様子

金木の冬は厳しく、前が全く見えなくなるほどの「地吹雪」に見舞われる日も少なくありません。その厳しさを逆手に取った観光プロジェクトが「雪国地吹雪体験ツアー」で、スタートから20年以上経過し、町おこしのイベントとして全国的に有名になりました。



雪国地吹雪体験ツアー

## 青森県内の太宰治文学碑

### 1 青森市

- ①中央市民センター「斜陽は赤い光を、樹々の葉に投げ、葉も枝も燃えるばかりに輝いてゐる。～」『走れメロス』
- ②文芸のこみち「さらば 読者よ 命あらばまた他日 元気で行こう 絶望するな では、失敬」『津軽』
- ③合浦小学校(校内)「すなおで かみさまのような いいこ」『人間失格』
- ④沖館稲荷神社「ああ、鎮めたまへ、～」『走れメロス』

### 2 外ヶ浜町

- ①観瀾山公園「かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった！」  
『正義と微笑』
- ②蟹田駅(案内板)「蟹田ってのは 風の町だね」『津軽』
- ③龍飛 旧奥谷旅館付近「ここは、本州の袋小路だ。読者も銘肌せよ。  
～」『津軽』

### 3 弘前市

弘前大学「私には、また別の専門科目があるのだ。～」『津軽』

### 4 五所川原市

- ①芦野公園「撰ばれてあることの 恍惚と不安と 二つわれにあり」『葉』
- ②金木小学校「微笑誠心」
- ③雲祥寺「汝を愛し 汝を憎む」『津軽』

### 5 深浦町

千畳敷海岸「直径一尺から二尺くらゐのたくさんの大穴をことごとく盃と見たてるなど、～」『津軽』

### 6 中泊町

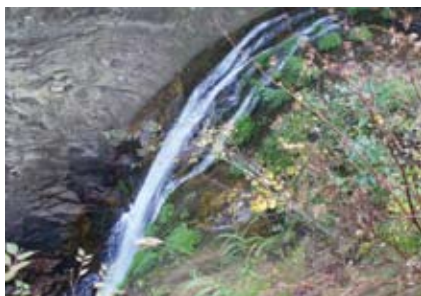
- ①小説「津軽」の像記念館「たけはそれきり何も言はず、きちんと正座して～」『津軽』(太宰の長女の筆)
- ②折戸公園「私は小泊港に着いた。～」『津軽』
- ③ライオン岩展望所「中古の頃から既に他国の船舶の出入があり、～」  
『津軽』
- ④木村菓子店隣「津軽へ来て、ぜひとも、逢ってみたいひとがいた。～」  
『津軽』
- ⑤診療所跡地「『ごめん下さい、ごめん下さい』『はい』と奥から返事があって、～」『津軽』(タケの五女の筆)
- ⑥ふれあい運動場「掛小屋へはいり、すぐそれと入違いに、たけが出て来た。～」『津軽』
- ⑦龍神様「小泊までたずねて来てくれたかと思うと、ありがたいのだか、～」『津軽』

昭和19年5月21～24日頃

## 小説『津軽』の金木（鹿の子川溜池）

兄とこうして、一緒に外を歩くのも何年振りであろうか。……私は兄から、あの事件に就いてまだ許されているとは思わない。一生、だめかも知れない。ひびのはいった茶碗<sup>ちやわん</sup>は、どう仕様も無い。どうしたって、もとのとおりににはならない。津軽人は特に、心のひびを忘れない種族である。この後、もう、これっきりで、ふたたび兄と一緒に外を歩く機会は、無いのかも知れないとも思った。

**（解説）** 津島修治（太宰治）は、昭和5年4月、東京帝国大学文学部へ入学する。しかし、その年の10月、修治と同居するため小山初代（最初の妻）が出奔。11月9日、長兄文治は、生家からの分家除籍を条件に、初代との結婚を承諾した。ところが、同月28日、カフェー「ホリウツ



鹿の子川

ド」の女給と鎌倉腰越町小動崎海岸で心中事件を図るといふ事件を起こしてしまった。原文中の「あの事件」とは、この（鎌倉心中事件）を指していると思われる。それだけではなく、修治は、長兄文治が怖れた左翼運動に接近、自首する事件、さらに、パピナル中毒のための強制入院などの事件まで引き起こしている。この間、生家・津島家の長兄をはじめ、家族・親戚・関係者などが修治に翻弄されることになる。

### 現代の五所川原市（金木）の様子

太宰の生家は、町内の旅館経営者が買い取り、太宰治文学記念館を併設した旅館として改装され、小説『斜陽』から「斜陽館」と命名して、昭和25年に営業を始めました。全国から多くの太宰ファンが宿泊しましたが、次第に旅館の経営が悪化し、旅館「斜陽館」は廃業となり、平成10年から太宰治記念館「斜陽館」としてオープンし多くのファンが訪れています。



太宰治記念館「斜陽館」



## 太宰治略年譜

年	項 目
明治 42 年	6月19日、津島源右衛門、たねの六男として生まれる。 戸籍名：津島修治。
大正 5 年	金木第一尋常小学校に入学。(7歳)
大正 11 年	尋常小学校卒業後、父の意向で明治高等小学校に1年通学。
大正 12 年	3月、父急逝。4月、青森中学校に入学。(14歳)
大正 14 年	3月、校友会誌に最初の創作『最後の太閤』を発表。 11月、同人雑誌「蟹気楼」を創刊、作家志望を思い立つ。
昭和 2 年	弘前高校入学。(18歳)
昭和 3 年	同人雑誌「細胞文芸」を創刊、本格的な創作活動に入る。
昭和 5 年	東京大学仏文科に入学。(21歳) 11月、鎌倉で薬物心中を図る。 12月、碓ヶ関温泉で小山初代と仮祝言を挙げる。
昭和 7 年	処女作『思ひ出』を執筆。
昭和 8 年	2月、<太宰治>の名で『列車』を発表。『魚服記』『思ひ出』を発表、好評を得る。(24歳)
昭和 10 年	8月、『逆行』が第1回芥川賞候補に挙がるが受賞を逸する。 9月、授業料未納により東京大学除籍処分を受ける。 10月、芥川賞選考委員の川端康成との間に応酬あり。
昭和 11 年	6月、砂小屋書房から第一創作集『晩年』刊行。 第3回芥川賞選考委員佐藤春夫との間に応酬あり。
昭和 12 年	6月、初代と離別。(28歳)
昭和 14 年	1月、石原美知子と結婚。(30歳) 甲府で生活する。 9月、三鷹に転居。
昭和 16 年	6月、長女誕生。 8月、母を見舞うため10年ぶりで帰郷。
昭和 17 年	10月、母重態のため妻子同伴で帰郷。 12月、母危篤の報に単身帰郷、同月母逝去。
昭和 19 年	5～6月、『津軽』執筆の旅。(35歳) 8月、長男誕生。
昭和 20 年	7月、妻子とともに生家に疎開。
昭和 21 年	11月、疎開を切り上げて上京。
昭和 22 年	3月、次女誕生。 11月、太田静子に女兒誕生。
昭和 23 年	6月、玉川上水に入水、誕生日に遺体が発見される。

昭和 19 年 5 月 25 日

## 小説『津軽』の木造（父の生家）

この家の間取りは、金木の家の間取りとたいへん似ている。……何の事は無い、父は金木へ来て自分の木造の生家と同じ間取りに作り直しただけの事なのだ。私には養子の父の心理が何かわかるような気がして、微笑ましかった。そう思って見ると、お庭の木石の配置なども、どこやら似ている。私はそんなつまらぬ一事を発見しただけでも、死んだ父の「人間」に触れたような気がして、……

**（解説）** 太宰の父・津島源右衛門は、木造村（現・つがる市）の名門松木家出身である。藩政時代には、苗字帯刀を許された郷士であった。源右衛門（松木永三郎）の父、八代目七右衛門の時代に薬種問屋に転業するまで造り酒屋を営んでいた。松木家は間口が36間（約65.5m）、奥行きが32間（約58m）の大邸宅



コモヒが残る商店街

であった。津島家に婿入りしたのが明治22年。新築の津島家（斜陽館）の竣工は、明治40年6月21日。敷地面積600坪、1階が11室154坪、2階が8室100坪である。おそらく「県下一の富豪、布嘉佐々木家は明治二十九年に建坪九百坪の御殿のような大邸宅を建てている。それに及ばないまでも、木造の生家松木家ぐらいの屋敷には住みたい」（『津島家の人びと』）と、源右衛門が考えたことは容易に推測できる。

## 現代のつがる市・木造の様子

太宰が言うように木造の歴史は古く、縄文晩期の集落遺跡である「亀ヶ岡石器時代遺跡」は国指定史跡となっており、ここから発掘された「遮光器土偶」は、宇宙服を連想させる特徴的な形態が有名で、重要文化財に指定され、現在は国立博物館で見ることができます。



遮光器土偶がシンボルのJR五能線木造駅

## つがる市の観光情報

亀ヶ岡遺跡から出土した土器や石器は「つがる市縄文住居展示資料館(カルコ)」に展示されています。また、森田地区の「石神遺跡」は縄文前期から中期にかけての遺跡で、出土物の多くが国の重要文化財に指定されています。また、日本海に面した木造・出来島海岸では、約1kmに渡って約2万8千年前の埋没林を見ることができます。

日本自然百選にも指定された木造・ベンセ湿原は、学術上貴重な海岸低層湿原及び中間層湿原で、6月上旬～中旬にはニッコウキスゲの黄色に染まり、6月下旬～7月上旬にはノハナショウブの紫色へと変わります。

『津軽』で、太宰が訪れたことがあると書いた高山は、車力地区にあり、日本海を望む眺望と赤い鳥居が無数に連なる光景が印象的な高山稲荷神社を見ることができます。



高山稲荷神社

## つがる市のゆかりの地

つがる市木造は、父源右衛門の生家があった地ですが、太宰は『津軽』の旅で初めて木造を訪れ、木造駅から、現在の木造郵便局付近にあった、松木薬品問屋に至る道を歩いています。



ポプラ並木と岩木山

「薄みどり色のポプラの若葉が可憐に微風にそよいでいた」と表現されたポプラ並木は現在も残り、木々の間から遠くに津軽富士岩木山の美しい山容を見ることができます。

太宰が「もくぞう警察署」と読み、はっと気付いて苦笑した「木造警察署」は、現在は、「つがる警察署」と名称が変わり、建物も鉄筋コンクリートになっています。

太宰が「コモヒの町」と称した商店街では、「町全部がコモヒによって貫通せられている」情景はなくなりましたが、当時の面影を残すコモヒがところどころに残っています。

## 小説『津軽』の深浦町（千畳敷）

右の窓に大戸瀬の奇勝が展開する。……岩盤が江戸時代の末期にお化けみたいに海上に露出して、数百人の宴会を海浜に於いて催す事が出来るほどのお座敷になったので、これを千畳敷と名付け、またその岩盤のところどころが丸く窪んで海水を湛え、あたかもお酒をなみなみと注いだ大盃みたいな形なので、これを盃沼と称するのだそうだけれど、……よっぽどの大酒飲みが名附けたものに違いない。

**（解説）** 千畳敷海岸は、寛政4年(1792年)の大地震によって地盤が隆起して水面に現れたものである。藩政期には、領内の巡検を兼ねた藩主が龍田神社の祭礼の後、この千畳敷に、氏子、信徒、関係者一同を招いて、畳千畳を敷き、200間(約400m)の幕を張って探勝の宴を開き、以後「千畳敷」と呼ぶようになったという。



千畳敷海岸

また、平成4年には、隆起生誕200年記念祭が行われ、当時の宴を再現し、畳千畳を敷き、千人前の西浜膳と千銘柄の日本酒を集め、大いに賑わったと観光ガイドに記されている。また、かぶと岩、ライオン岩、盃乃潤などの様々な奇岩・怪石に囲まれて、自然景観の美しい千畳敷海岸は、日本の水浴場55選にも選ばれた、全国有数の海水浴場でもある。

平成5年、この地に太宰治の文学碑が建立された。

### 現代の深浦町の様子

太宰は、木造から五能線に乗って深浦に到着していますが、現在、JR五能線で木造駅と千畳敷駅は約1時間、深浦駅は約1時間半で結ばれています。沿線には、日本海に沈む夕陽を見ながら入浴できる露天風呂で人気の黄金崎不老ふ死温泉をはじめ温泉が豊富で、日本一の大イチョウがあることでも知られています。



日本一の大イチョウ

## 深浦町の観光情報



十二湖・青池

民族資料館・美術館では、縄文時代の遺跡からの出土品や藩政時代から現代に至る歴史を紹介、美術館では青森県内で活躍する芸術家の作品を見ることができます。

『津軽』で「吾妻浜の奇巖、弁天嶋、行合岬など……」と書かれた以外にも、黒崎海岸、椿山、岡崎海岸など美しい海岸線が続き、海岸線に沿って走るJR五能線は、風光明媚な鉄道として知られています。

また、白神山地の一角にある十二湖は、ブナ林の中に大小33の湖沼が透き通った水をたたえる光景を楽しむことができます。

## 深浦町のゆかりの地

千畳敷海岸には、『津軽』の一節が刻まれた千畳敷海岸隆起生誕200年記念碑が建っています。

太宰が宿泊し、兄英治と中学校の同期生だった旅館の主人に歓待を受けた旧秋田屋旅館は、改築され「太宰の宿・ふかうら文学館」になっています。文学館の2階には、実際に太宰が泊まった部屋を当時のまま再現した「太宰宿泊の間」があり、文学館の前には、「葉書を一枚買って、東京の留守宅へ短いたよりを認めた」ポストも再現されています。

太宰がお詣りした円覚寺には、国の重要文化財に指定され、県内最古の木造建造物と言われる「薬師堂内厨子」、国の重要有形民俗文化財の「まげ額」、「船絵馬」など、数々の寺宝があります。また、本尊の十一面観音は、聖徳太子の作と伝えられ、33年ごとに開帳されます。



円覚寺

## 小説『津軽』の深浦町（深浦）

東京の草屋の子供の事など、ふと思った。なるべく思い出さないようにしているのだが、心の空虚の隙をねらって、ひょいと子供の面影が胸に飛び込む。私は立ち上って町の郵便局へ行き、葉書を一枚買って、東京の留守宅へ短いたよりを認めた。……／……私はその広い部屋でひとりでお酒を飲み、深浦港の燈台の灯を眺め、さらに大いに旅愁を深めたばかりで宿へ帰った。

**（解説）** 太宰は、疲れもあったからか旅愁を感じていた。津軽の旅は2週間目を迎えようとしていた。外ヶ浜の旅とは、だいぶ趣を異にしている。小野正文は「この短い文章の持つ、虚無と倦怠は、全く、この作家の本来性に根ざすものである。これが、四年後の『桜桃』の世界を予感させる原型のように思われる。深浦では勿論桜桃は出なかったが、鯛と鮑がゆたかにお膳をにぎわしている。わが救いはずこよりきたるや、という状況のときでも、酒と肴ができれば、それが小さな救いであるかのように太宰はよろこぶ。深浦に一泊するが、その首尾はかならずしも上々ではなかった」（『文学のある風景』）と記している。なお、太宰は翌年の7月、金木へ疎開する途中、この旅館（秋田屋旅館・現「太宰の宿・ふかうら文学館」）に1泊している。



太宰の宿・ふかうら文学館（旧秋田屋旅館）

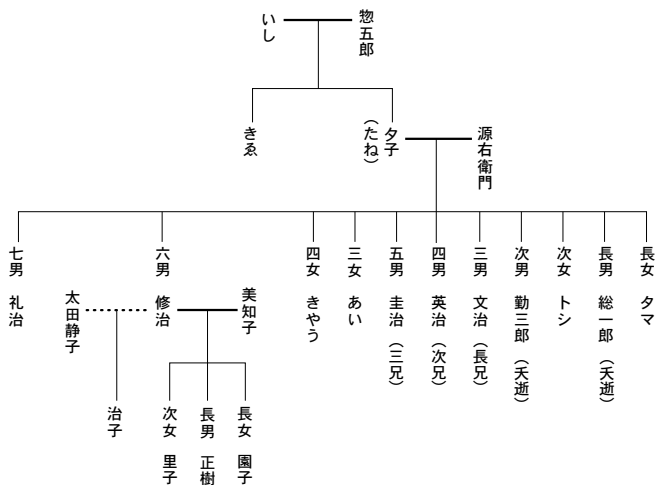
### 現代の深浦町の様子

深浦町は、世界自然遺産白神山地への西側の入口として知られています。白神山地には人間活動の影響をほとんど受けていない原流域が集中し、世界最大級のブナ林が広域に渡ってほぼ原生そのままの姿で残されています。また、ほ乳類、鳥類、昆虫類などの宝庫でもあります。



紅葉のブナ林

## 太宰治の人間関係



生家の庭で、左から姉あい、太宰、従姉テイ、姉トシ、姉きやう、甥逸朗、弟礼治

昭和 19 年 5 月 26 日

## 小説『津軽』の五所川原（乾橋）

このたび私が津軽へ来て、ぜひとも、逢ってみたいひとがいた。私はその人を、自分の母だと思っているのだ。三十年ちかくも逢わないでいるのだが、私は、そのひとの顔を忘れない。私の一生は、その人に依って確定されたといっているいいかも知れない。

（解説） 太宰は〈原文〉以外にも、タケに逢うことを願っていると述べている。たとえば「こんどの津軽旅行に出発する当初から、私は、たけにひとめ逢いたいと切に願あとまわをしていたのだ。いいところは後廻しという、自制をひそかにたのしむ趣味が私にある。私はたけのいる小泊の港へ行くのを、私のこんどの旅行の最後に残して置いたのである」や、中里で鉄道からバスに乗り換えるとき親戚の娘さんから声をかけられたときも「私はもう、早くたけに逢いたくて、他の事はみな上の空である」という心境である。つまり、太宰はこの『津軽』という作品の構成のラスト・シーンは小泊に、最初から決定していたと考えられる。

実際の津軽の旅の終点は蟹田の中村貞次郎宅だが、小泊をラストに設定することによって、小説としての興味が増すと考えたのではないか。



乾橋から見た岩木川と岩木山

### 現代の五所川原市の様子

太宰が母と慕う叔母きゑが住み、幼少時よりたびたび訪れた五所川原は、津軽北部の商業の中心地として栄え、郊外の大型ショッピングセンター「エルムの街」には、市内外から多くの買い物客が訪れます。また、車窓から見る海岸線、日本海に沈む夕陽等で人気のあるJR五能線、季節ごとに趣のある企画列車が人気の津軽鉄道が通る津軽観光の起点ともなっています。



「エルムの街」ショッピングセンター



## 五所川原市の観光情報

夏の夜を焦がす立佞武多は、五所川原市の伝統芸能でしたが、電線の影響などで小型化し“ねぷたまつり”として行われていたものを、平成10年に高さ20メートルを超える立佞武多が出陣し、再興されました。まつりは毎年8月4日から8月8日まで行われ、立佞武多の館では常時3台の大型立佞武多を見ることができます。

また、6月に行われる「奥津軽虫と火まつり」では、稲を病害虫から守ることを目的に伝わる慣習である「虫おくり」が行われ、長さ10メートルを超える龍蛇体状の「虫」が市内を練り歩き、フィナーレには「虫」に火をつけ昇天させます。

この地は古くから須恵器の産地としての歴史を持ちますが、昭和60年、良質の粘土を産する金山地区に新たな窯が開かれ、津軽金山焼が生まれました。ギャラリーや工房を備えた本店では、焼かれた陶器の販売はもちろん陶芸教室も開かれ、陶芸やピザ、ストラップを作る体験することもできます。

## 五所川原市のゆかりの地

太宰が「生みの母よりも、この叔母を慕っていた」叔母き糸の家があった場所は、現在津島歯科医院になり、隣にある蔵は、太宰が訪ねた当時の外観を残しています。

太宰は、鱈ヶ沢から五所川原に入り、実質的な世話人となっていた中畑さん宅を訪ねています。その後、中畑さんの娘のけいちゃんと岩木川に架かる乾橋に行き、ハイカラ町の叔母宅を訪ねましたが、叔母は不在でした。太宰がタケとの思い出を語った乾橋からは、現在でも、岩木川や岩木山を見ることができます。



立佞武多



旧叔母き糸宅蔵

昭和 19 年 5 月 27 日

## 小説『津軽』の金木（芦野公園駅）

窓から首を出してその小さい駅を見ると、いましも久留米<sup>くろめがすり</sup>緋の着物に同じ布地のモンペをはいた若い娘さんが、大きい風呂敷<sup>ふろしき</sup>包みを二つ両手にさげて切符を口に咥<sup>くわ</sup>えたまま改札口に走って来て、眼を軽くつぶって改札の美少年の駅員に顔をそっと差し出し、美少年も心得て、その真白い歯列の間にはさまれてある赤い切符に、まるで熟練の歯科医が前歯を抜くような手つきで、器用にぱちんと鉗<sup>はさみ</sup>を入れた。

**（解説）** 太宰は、小泊のタケに会うため、朝一番の津軽鉄道の列車に乗る。芦野公園で窓から首を出して見たときの光景である。まるで、映画のワン・シーンのような、きわめて印象的な場面である。原文に続く「少女も美少年も、ちっとも笑わぬ。当り前の事のように平然としている。少女が汽車に乗ったとたんに、ごとんと発車だ。まるで、機関手<sup>きかんて</sup>がその娘さんの乗るのを待っていたように思われた。こんなのかな駅は、全国にもあまり類例が無いに違いない」の文章もすばらしい。『津軽』には名場面がいくつかあるが、太宰文学の特徴の一つであるその文章の巧みさが、ここにもある。この〈名場面〉は芦野公園駅であるゆえに、つまり、太宰の文学碑の入り口であるゆえに、有効な観光資源であると確信する。



芦野公園駅旧駅舎（現・喫茶店）

## 現代の五所川原市（金木）の様子

津軽鉄道芦野公園駅は、桜や老松が広がる公園内に佇む無人駅として、東北の駅百選となっている駅で、ホームや線路の脇にも何本もの桜の木があり、満開の頃には列車と桜を狙うカメラマンなどでも賑わいます。現在使用されている駅舎の隣に、昭和5年に建てられた旧駅舎が移築されており、現在は喫茶店として営業しています。



芦野公園・文学碑

## エピソード紹介

### 犬嫌い

「犬の傍を通る時は、どんなに恐ろしくても、絶対に走ってはならぬ。にこにこ卑しい追従笑いを浮べて、無心そうに首を振り、ゆっくりゆっくり、内心、背中に毛虫が十匹這っているような窒息せんばかりの悪寒にやられながらも、ゆっくりゆっくり通るのである。」（『畜犬談』より）

### 芥川賞事件

昭和10年8月、太宰の『逆行』が第1回芥川賞の候補になったが、その選考過程を巡って選考委員の川端康成との間に応酬があった。

また、翌年夏の第3回芥川賞選考に当たり、太宰は佐藤春夫宛てに授賞依頼の手紙を書くが、前回最終候補に残った太宰には受賞資格はなかった。しかし、選考委員の佐藤春夫の力で受賞できるものと思っていた太宰は、佐藤との間にも応酬を繰り返すこととなった。

### メロス体験

昭和11年、熱海で執筆中の太宰の下に、友である作家檀一雄が妻初代からの依頼で金を持参した。太宰は宿代を支払うことなく檀と豪遊、宿代を使い果たした太宰は、金策のため東京の菊池寛の所に行くと言い、檀を人質にして上京。しかし、なかなか帰って来ないため、檀は宿の主人の名代とともに井伏鱒二を訪ねたところ、太宰は井伏と将棋を指していた。いきり立って怒鳴る檀に、太宰は「待つ身が辛いかね、待たせる身が辛いかね。」と言ったそうである。

### 棟方志功

青森中学2年の時、下宿先の近所の花屋に飾られていた洋画を購入、下宿先の豊田太左衛門氏に贈ったが、この絵が無名時代の志功の作品だった（随筆『青森』より）。また、昭和14年の東奥日報社主催青森県出身在京芸術家座談会に出席した太宰は、同席した志功からんで退席するという失敗をおかしている。

### 好きな食べ物

『津軽』では、「蟹、蝦、しゃこ、何の養分にもならないような食べものばかり好きなのである。」と書いているが、普段から食べているもので好きなのは、バナナ、すじこ納豆、湯豆腐、酒の4つ、これがあれば、他に何もいらなかったようである。

### 太宰治と味の素

太宰は、調味料・味の素について『HUMAN LOST』と『グッド・バイ』の作品で触れています。また、檀一雄著『小説 太宰治』にも、太宰がいかに味の素を好んでいたかが、3か所にわたって描写されています。

## 小説『津軽』の市浦（十三湖）

やがて、十三湖が冷え冷えと白く目前に展開する。浅い真珠貝に水を盛ったような、気品はあるがはかない感じの湖である。波一つない。船も浮んでいない。ひっそりしていて、そうして、なかなかひろい。人に捨てられた孤独の水たまりである。流れる雲も飛ぶ鳥の影も、この湖の面には写らぬというような感じだ。

**（解説）** この描写に接してからは、十三湖を見るたびに「浅い真珠貝に水を盛ったような」とか、「流れる雲も飛ぶ鳥の影も、この湖の面には写らぬような」といった形容辞で感懐を述べたくなる。つまり、太宰の文章をなぞっていることになる。それほど太宰の風景描写は巧みだということだ。



十三湖遠景

『津軽』にかぎっても、風景描写が素晴らしいことは、たとえば岩木山についての描写や高流山からの眺望の表現などに見てとることができるように、太宰の風景（自然）描写は、まことにすぐれていると感動せざるを得ない。この十三湖は、その中でも、特に印象的だ。長部日出雄の文章に、「いつ行っても、十三湖の風景のほうが、太宰の文章の真似をしているように見える」という絶妙な表現があるが、太宰文学の秘密のなかに、この文章表現の巧みさがあることは、まちがいない。

### 現代の五所川原市（市浦）の様子

太宰は、小泊に向かうバスに乗って、市浦を通過しています。現在は、合併により五所川原市・市浦となり、歴史と観光で賑わう地域ですが、津軽鉄道の終点は中里駅であり、中里からさらに津軽半島の北をめざす人は、バスに乗ることになります。



十三湖名物しじみラーメン

十三湖は国内有数のしじみの産地で、周辺の飲食店では、各種しじみ料理を堪能することができます。

## 五所川原市(市浦)の観光情報

太宰が「……津軽平野の歴史の中心は、この中里から小泊までの間に在ったものらしい」と言うように、鎌倉時代後期には、市浦・十三湖周辺は豪族安東氏の本拠地で、北海道との重要交易拠点として栄えていました。しかし、近年まで日本史にもほとんど登場しない、言わば「知られざるもう一つの日本」で、謎に満ちた「ロマンの街」でもありました。当時の様子は、平成3年からの国立歴史民俗博物館の十三湊遺跡の発掘調査によって明らかになり、「市浦歴史民俗資料館」でその概観を見ることができます。また、十三湊遺跡は、国史跡に指定されています。十三湖周辺には、10～11世紀の築造と考えられている「福島城跡」、安東氏が営んだ宗教施設が発掘された「日吉神社」、安東氏が鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて拠点にしたと推定される「唐川城跡」などの史跡が点在しています。

十三湖に浮かぶ小島「中の島」には、湖岸から250mのヒバの橋で渡ることができ、ブリッジパークが整備されています。パーク内には「地域活性化センター」、「市浦歴史民俗資料館」、ケビンハウス、キャンプ場、ゴーカート場などの様々な施設があります。また、しーうらんど海遊館は、タラソテラピーが体験できる海水の温水プールの種類が豊富で、健康に配慮した施設として人気があります。

## 五所川原市(市浦)のゆかりの地

太宰は、『津軽』で市浦の歴史やバスの窓からの「風景」について触れていますが、具体的に描写しているのは十三湖のみです。十三湖は津軽国定公園内にあり、岩木川の河口に広がる周囲約30kmの湖。青森県では小川原湖、十和田湖に次ぐ3番目の広さを誇りますが、最も深いところでも約1.5mしかなく、十三瀉とも呼ばれています



山王坊・日吉神社



十三湖と岩木山

## 小説『津軽』の小泊（運動場）

私には何の不满もない。まるで、もう、安心してしまっている。足を投げ出して、ほんやり運動会を見て、胸中に一つも思う事が無かった。もう、何がどうなってもいいんだ、というような全く無憂無風の情態である。平和とは、こんな気持の事を言うのであろうか。もし、そうなら、私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言ってもよい。

**（解説）** 評伝小説『桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝』を書いた長部日出雄は、この『津軽』のラスト・シーンを「明らかに太宰は、意識して小泊を津軽の旅の最後に選んでいる」と述べている。そして、「……ここに描かれているのは、太宰が憧れ続けていたニルヴァーナ（涅槃）の境地である。このとき彼は、ほとんど胎児のような状態にあったのではないと思われる。……彼は、一生を通じて、胎内への憧れを断ち切ることができなかった。……太宰はまさに、本州北端の海辺に、彼の「母」を見出したのだ。……」（『神秘世界の太宰治』）と解説している。つまり、太宰の生涯は、「母性的なやさしさを求め続けた旅であった」と長部日出雄はみている。



小説「津軽」の像

### 現代の中泊町・小泊の様子

太宰に「……ここは人口二千五百くらいのささやかな漁村であるが、……この村の築港だけは、村に不似合いなくらい立派である」と書かれた小泊漁港は、現在もマイカ、メバル、ヤリイカ等の水揚げで賑わっています。付近には、屋上にイカ釣り船を配したイカの街・小泊のPRセンター「日本海漁火センター」等が整備されています。



小泊漁港遠景

## 中泊町の観光情報

中泊町は、旧中里町と旧小泊村が合併して誕生しました。中里地区には、景勝地「不動の滝」の清らかな瀑布が四季折々の美しいたたずまいを見せ、平成の名水百選に選ばれた「涌つぼ」から澄んだ水が渾々と湧き出ています。



龍飛から見た権現崎

小泊岬は、日本海に突き出した岬で、海拔229mの尾崎山に龍飛大権現が祭られていることから、権現崎とも呼ばれ、断崖絶壁がつづき、一带は津軽国定公園に指定されています。海岸線には「ライオン岩」「羅漢石」「経島」「姥石」「弁天崎」「七つ石」「青岩」「傾り石」等が連なり、小泊マリパークや折腰内オートキャンプ場等も整備されています。また、内陸部にも「七つ滝」や眺瞰台からの日本海と岩木山の眺望など見所いっぱいです。

小泊地区には、秦の始皇帝に仕えた中国の方士「徐福」の伝説があり、平安時代建立といわれる尾崎神社には、徐福が漁業の神様として奉られています。現在、神社から離れた景勝地ライオン海道沿いに徐福の里公園が整備され、「徐福の像」も建立されています。

## 中泊町のゆかりの地

小泊は、太宰の育ての母タケが嫁ぎ「旅行の最後に残して置いた」、『津軽』におけるクライマックスの場面となった地です。嫁ぎ先の越野金物店は売却され、現在は民家になっています。近くには太宰が道を尋ねた横野たばこ店があり、タケの写真等が展示されています。また、運動会が行われた校庭を見下ろす場所に再会公園が造られ、太宰とタケが運動会を見る場面が再現された小説「津軽」の像が建立され、傍らには、太宰の長女園子さんの筆による文学碑があります。隣接する小説「津軽」の像記念館には、生前のタケが太宰との再会について語るビデオや園子さんが父太宰の回想を語るビデオなども見ることができます。



横野たばこ店

## 太宰治関連の主な映画紹介

公開年	映画タイトル	作品名	出演者等
1944年	四つの結婚	佳日	監督：青柳信雄 出演：長女 入江たか子 次女 山田五十鈴 三女 山根 寿子 四女 高峰 秀子
1947年	看護婦の日記	パンドラの匣	監督：吉村廉 出演：折原啓子 小林桂樹
1949年	グッド・バイ	グッド・バイ	監督：島耕二 出演：若原雅夫 高峰秀子
1963年	真白き富士の嶺	葉桜と魔笛	監督：森永健次郎 出演：宮口精二 吉永小百合
1967年	斜陽のおもかげ	斜陽のおもかげ (太田治子)	監督：斎藤光正 出演：吉永小百合 岸田森
1978年	新・人間失格	人間失格	監督：吉留絃平 出演：大森博 吉田日出子
1992年	走れメロス (アニメ)	走れメロス	監督：おおすみ正秋 声：山寺宏一 中森明菜
2002年	ピカレスク ー人間失格ー	ピカレスク ー太宰治伝ー (猪瀬直樹)	監督：伊藤秀裕 出演：河村隆一 さとう玉緒
2006年	「富嶽百景」 ～遙かなる場所～	富嶽百景	監督：秋原正俊 出演：塚本高史 田丸麻紀
2009年	斜陽	斜陽	監督：秋原正俊 出演：佐藤江梨子 温水洋一
	ヴィヨンの妻 ～桜桃とタンポポ～	ヴィヨンの妻	監督：根岸吉太郎 出演：松たか子 浅野忠信
	パンドラの匣	パンドラの匣	監督：富永昌敬 出演：染谷将太 川上未映子

2010年「人間失格」(出演：生田斗真、三田佳子)が公開予定。



## 太宰治周辺の文学者紹介

**井伏鱒二**(1898～1993) 小説家。広島県福山市生まれ。

太宰は、中学時代、井伏の『幽閉』（後に『山椒魚』）を読んで感銘を受け、高校時代に創刊した『細胞文芸』に寄稿を依頼、大学入学後直ちに師弟関係を結んだ。以後、私生活面での苦境に際し井伏の世話になっている。戦後、太宰は井伏を遠ざけるようになったが、死後、山梨・御坂峠に文学碑を建立した際、井伏は自分で石を背負って行ってでも建ててやると言った。二人の深い心の交流を示す文学碑である。

**佐藤春夫**(1892～1964) 詩人、小説家。和歌山県新宮市生まれ。

太宰とのかかわりは、太宰の作品が、佐藤が選考委員を務める第一回芥川賞候補になったことに始まる。昭和11年、太宰は第三回芥川賞落選に強い衝撃を受け、『創生記』で佐藤から芥川賞受賞の可能性を漏らされたと暴露する。これに対して佐藤も実名小説『芥川賞』で応酬、一時険悪な関係になる。戦後、青森県知事となった長兄文治と親交を結び、十和田湖畔の乙女の像建立の際、高村光太郎との交渉役を依頼されている。

**檀一雄**(1912～1976) 小説家。山梨県都留市生まれ。

昭和8年太宰との交友が始まるが、すでに『魚服記』『思ひ出』を読み、その才能の並々ならぬことを感じていた檀は、昭和9年、季刊文芸誌「鶴」を創刊したが、太宰の作品を掲載するため生母から借金して発行した雑誌だという。檀と太宰の交友はお互いの生活を乱すものとなるが、檀は、友情という一点だけは忘れることはなく、第一創作集『晩年』発行に奔走し、昭和40年の観瀾山の文学碑の除幕式にも出席している。

**今官一**(1909～1983) 小説家。弘前市生まれ。

昭和8年、同人誌「海豹」創刊に際して、太宰をメンバーに加えるよう強力に推薦、文壇デビューのきっかけを作る。以後、「青い花」の創刊にともに参加、同郷のよしみで生涯親交を結ぶ。昭和14年、青森県出身在京芸術家座談会での失敗を書いた『善蔵を思ふ』に登場する「甲野嘉一」は今のことで、同郷の文学者でもっとも太宰をよく理解し、太宰が心を許したのが今であった。「桜桃忌」の命名者でもある。

このほか、芥川賞選考を巡って応酬のあった小説家の**川端康成**、昭和8年頃から太宰の死の直前まで交友を持った劇作家・放送作家の**伊馬春部**、太宰が都新聞社受験する機会を作り、『失踪』に対し太宰が『喝采』で応酬したこともある小説家の**中村地平**、近所付き合いがあり、太宰文学にもよく理解を示した文芸評論家の**亀井勝一郎**がいる。また、**三島由紀夫**、**中原中也**との逸話も残っている。



小説「津軽」の像記念館（小泊）

さらば読者よ、命あらばまた他日。

元気で行こう。絶望するな。では、失敬。

### 旅の記録

旅 先	津 軽	
旅 人	太宰 治	
旅 行 日 程	昭和 19 年（1944 年） 5 月 12 日～6 月 5 日	

## 太宰治と歩く現代の「津軽」の旅

---

2009年11月

発行－青森県東青地域県民局地域連携部

執筆者－（小説『津軽』の解説部分、五十音順・敬称略）

齋藤三千政（弘前ペンクラブ会長）

星野富一郎（北狄同人）

米田省三（十和田市教育委員会教育長）

写真提供－青森県近代文学館、弘前市、五所川原市、今別町、  
外ヶ浜町、深浦町、ELMの街ショッピングセンター、  
金木観光物産館マディニー、NPO法人おおまち第  
2集客施設整備協議会、谷口清和、中島久宜

